神学部・文学部・社会学部共催 学術講演会

カルヴァンとその時代の文化*

バーゼル大学教授 オリヴィエ・ミエ
林 伸一郎**
森 川 甫***共訳

人々がカルヴァンに、彼の時代の文化の中での位置づけという観点から関心を持ち始めたのは、20世紀になってからのことです（例えばJ. ボアテック[1]やF. ヴァンデル[2]の先駆的な業績を参照)。それまでカルヴァンは神学者、教会の改革者として見られていたにすぎず、文化史的に限定された一時代に属している思想家、つまり16世紀ルネッサンス、中でもフランスのルネッサンス期に属する思想家として見られたことはありませんでした。専門の神学者としてではなく、その時代の文化に属している一思想家として考察することで、カルヴァンはその著作を通してその時代の文化の中で執拗に問われ続けていた問題に答えようとしていたのだという事実がよりよく理解できるようになります。神学のみという観点より一層広い範囲に及ぶこの［文化史的位置づけという］観点［を採ること］の正当性を、2つの事実が証明してくれます。まず青年時代、カルヴァンは神学ではなく、法律を学んでいたという事実、そして彼の福音主義的改革への回心は、おそらく、ユマニスム（人文主義）的研究に対する彼の関心と聖書釈義の領域で生じた革新とに結びついているという事実、この2つの事実です。カルヴァンは最初から、後に宗教改革者となる神学者にして聖職者であったのではありません。まず彼は法律を学ぶ学生であり、ユマニストなのであって、彼自身が行っていた研究や歴史、古代文化そして聖書に対するその関心がこのような人物を宗教改革者に仕立て上げたのです。今日聴いていただく短い発表の中で、私はカルヴァンの時代の文化の中に存在していて、彼がその著作を通して答えをもたらそうと努めた問題の中から2つの問題を示して、カルヴァンが単なる神学者でしかない人物ではなく、彼の時代の文化に属している思想家なのだという事実を照らし出したいと思っております。まず第一の問題はイデオロギーの次元の問題であって、いわゆるルネッサンスのユマニスムに直面してカルヴァンが採った態度に関わっています。第二の問題は社会学的な次元の問題であって、当時としては新しい文明であった印刷本文明の中でカルヴァンが果たした役割と日常語（＝学問的言語とは異なる言語）つまりフランス語の発展に資することになった彼の活動に関わっています。

Ⅰ．ユマニスムに直面するカルヴァン

西洋文化史においてユマニスムと呼ばれているものは、14世紀にイタリアで始まり、最終的には15世紀、特に16世紀にヨーロッパのほとんどの国にその影響が及ぶことになった知的・宗教的運動です。ユマニスムは知性に、道徳に、教育に関わる生活の諸条件を根本から変えてしまいました。この激動は中世と言われている時代と16世紀から始まる近代との断絶を説明する主な理由の一つです。ここではまずユマニスムを簡潔に定義して、ついでカルヴァンが遭遇した問題を示すことにい

---

*カルヴァン、16世紀、文化

**林伸一郎　関西学院大学兼任講師
***森川　甫　関西学院大学社会学部教授

1) BOHATEC (J.) *Calvins Vorsechungslehre* (*Calvinstudien*, Leibzig, 1909)
2) WENDEL (François) *Calvin, sources et évolution de sa pensée religieuse*, PUF, 1950.